

## 「ミャンマーでの体験の振り返り」

京都大学法学部 1 回生 眞鍋大志

今どきの流行なのかは知りませんが、高校生や大学生には短期留学やホームステイといった形で短期間を海外で過ごすという企画がたくさん用意されていて、また、学校なども学生たちにそれらに参加するよう勧めることが少なくないと感じます。そこでは、「グローバル人材」だとか「異文化交流」だとかいう文句が華々しく宣伝されるため、我々学生の方も、海外を経験するのはよいことだというのが、なんとなく正しいのだというふうに感じます。海外に行けば、普段自分達が接しているのとは全く違う「異文化」があり、それに触れることにより自分の価値観が変えられるのだという期待を漠然と抱いたりもします。僕の通った高校、通っている大学もまさしくそういうふう「グローバル」を金科玉条のように掲げています。その上僕は今回のミャンマー滞在までは一度たりとも海外に行ったことがなかったため、海外経験こそが良いものだというふうにかたくなに信じたまさしくその典型という感じでした。そのように今まで見たことのない世界に巡り合って貴重な体験をすることを期待していた僕が、その旅先でどんな「異文化」と接したかについての体験談をいくつかと、また、旅を終えた僕が今回の企画全体をどう振り返るかを書きたいと思います。

最初の話はミャンマーに着いてすぐの話です。2015年2月12日の朝、日本から8時間の移動を終えて、僕はミャンマー最大の都市ヤンゴン市内の空港に到着しました。空港内での手続きに少々手間取った僕は、到着時にはただただ疲れたという感じであったため、ミャンマーの地を踏むと同時に感動を味わうというような余裕はありませんでした。しかし、気を取り直してヤンゴン市内を車で移動していると、やはりこれは日本とは違うなという感覚がじわじわと湧いてきました。そして、なるほどこれが海外か、などというふうに思いました。

初めて海外に降り立ちじわじわと高揚感を感じているという初日でしたが、その日の午後、市内にあるシュエダゴン・パゴダという名の寺院を訪れました。その寺院は仏教国であるミャンマーにおいても、知名度、規模ともになんかなり大きいようで観光地としても有名なところですが、僕がまずはっきりと「異文化」を感じたのがここです。ミャンマーでいうところの寺院とは、仏塔のことで、日本によくあるお寺とはまるで風貌が違います。しかもそのシュエダゴン・パゴダはサイズもばかにかいし色だって全体が黄金色なので、その見た目からもそれが異文化のものであるということははっきりしているのですが、寺院の見た目以上に、その場の雰囲気、その場にいる人々の様子についてもそうです。境内は広く、屋外なのですが土足厳禁で、人々がもうそこらじゅうにペタペタ座り込んでいてペチャクチャ喋っているのです。あたりはとても賑やかなのですが、そのにぎやかな中で熱心に仏様を拜んでいるという人もいます。お婆さんも子どもも関係なく熱心に地面に頭をこすりつけるようにしています。僕はそれを見てとても感心しましたが、その様子がほんとはあまりにも熱心すぎるように思えたので実に不思議だというふうにも思いました。

また次の日は、今度はヤンゴン市とは異なりもっと田舎の、チョンチャイ村というところにある寺院を訪問し、そこのお坊さんと近隣の方々とお話をするという機会がありました。近隣の方々というのは大人の男の人がほとんどです。通訳の肩を介してお互い質問しあうといった形式だったのですが、将来の夢は何かと尋ねた時の彼らの回答に惹かれたため、ここで紹介します。まずはお坊さんの答えです。お坊さんは、これからもっと仏教のことを勉強して、それを多くの人に伝えたいのだとおっしゃいました。ミャンマーではお坊さんというのは人々にとっても慕われている存在です。その場にいたほかの人たちによると、お坊さんのことを仏教、及びその教えを象徴するものだと捉え、それゆえお坊さんのことを尊敬しているのだというふうに口をそろえて言っていました。次にその人たちの答えです。彼らのほとんどはもう家庭を持っているお父さんたちでしたが、将来の夢を尋ねると、家族の暮らしを守ることと、優しく生きることという答えがほとんどでした。この人たちは、そういう人たちです。僕は、大人の男の人が集まって輪になり、初対面の僕らとも真剣に話し合い、本気で質問にも答えてくれるという状況がとても快くうれしく思いましたが、また、この方々があまりにも真剣に応じてくれるので少し不思議だというふうにも感じました。そしてここで感じた不思議こそが、僕がまさに「異文化」に触れたことの証なのだろうと、後になって思います。これが1つ目の話です。

次に2つ目の話に移ります。この話は、ミャンマー滞在5日目の2月16日に行った道直しの時の話です。ところで、ミャンマーの人というのは英語が話せないのがほとんどです。もちろん外国人観光客を相手に商売するホテルのスタッフやタクシー運転手などは英語を話したりしますが、そうでない一般の人達には本当に通じないことが多いのです。今回僕らが共同で道直しを行った現地の方々も英語はまったく通じなかったため、言葉での意思疎通は全くできないといった状況でした。しかしこれは、英語でのやり取りに難があり、相手が何を言っているのかがほとんど聞き取れないでいた僕にとってはむしろありがたいぐらいでした。なぜなら、そもそもお互い言葉が通じないのだから、相手の言うことが聞き取れないからといって相手に対して後ろめたさを感じる必要が全くないからです。共同作業が始まってからも、言葉が全く通じないので、僕はほとんど何も喋らずにいました。その代わりに、道直しの仕事に、できるだけ一生懸命取り組むことにしました。その場にいる人たちの中でも一番熱心なぐらいに働いてやろうと思いました。そうすることで、あわよくば、彼らの方で僕に一目置いてくれるようになるのではなどと期待したからです。そして実際おおよそ期待したようになったかと思えます。僕と一緒に作業していたのは小中学生ぐらいの男の子達とおばちゃん達だったのですが、その群は実際、周りのほかの人達よりもひとときわ元気に、精力的に、楽しく働いていたというふうに思います。

一緒に働いていたその群の中にシャングリーという青年がいました。彼は群にいたほかの子供たちより少し年上で、内面もやや大人びた感じの寡黙な青年です。人当たりはあまりよくはありませんでしたが、僕が熱心に働いて見せたのが功を奏したのか、彼は仕事の間中ずっと僕の近くにいて手を貸してくれました。僕の方も、なんとなく彼の気持ちが解

らんでもないという気がしたので、彼には親しみを少し感じていました。そんな中、作業の合間に 2 人突っ立って休憩していた時、彼が懐から物を取り出してそれを僕にくれました。それは、「コンヤー」というミャンマーの嗜好品で、日本には無いものです。コンヤーは、口に含んで噛み続ける物であるという点でガムのようなものですが、その成分には体にとって害であるものが含まれているため、噛んだ後の唾液は絶対に飲みこんではいけません。また、コンヤーには覚醒作用があり、噛んでいるとまるでアルコールに酔ったような状態になると言われている物です。僕はそのことを知っていたため、コンヤーを差し出されたその時はふと緊張しました。しかし、それまでの作業でその人達ともやっと打ち解けかけていた頃だったので、これは断るわけにもいかないと思いました。また、僕はその時、これが「異文化交流」の登竜門であるというふうにも思ったので、コンヤーを受け取り口に含みました。そして、実に美味しいというような仕草も付け足しました。近くにいた子ども達は興味ありげに僕の方を見てくるし、大人達は半分心配そうにして、唾液は飲んではいけないよということを身振りで僕に伝えようとしてきました。当のシャングリーはどうやら一人で満足しているというようでした。周りの人があんまりこちらを見てきたので、僕はいかにも当然だというように道端に唾を吐き、何事もないというようにそれまでやっていた仕事を再開してやりました。ところが実際のところはどうだったかというところ、このとき僕は、コンヤーの覚醒作用のため、前後不覚なほどに目が回っていて、すぐにも座り込みたいという状況だったのです。もしかすると何人かは、僕が本当は目が回っていたということに気付いたかもしれませんが、大方の人には気付かれていないようだったので、ひとまずその登竜門を超えたと言っていいでしょう。その後はもう本当に自分もその人達と同じだというふうに感じましたし、恐らくほかの人達も同じように思っていたと思います。シャングリーとは最後まで一緒に仕事をして、最後別れるときはお互い感謝して抱き合いました。全然別の場所で生きていて言葉も通じない人達とこんなに親密になれたのはとても不思議です。この話は僕の「異文化交流」の成功談です。

最後にもう 1 つ体験談を書こうと思います。この話は前のとは違い、失敗談です。それは 2 月 15 日、ミャンマーでの生活に慣れだした滞在 4 日目の朝の話です。その日の朝、僕はホテルの朝食サービスを利用することにしました。朝食の場に行くと、スタッフの方が調理してくれるので席で待つということでした。僕はテーブルについて一人で待っていたのですが、そのテーブルの上には、ポットに入ったコーヒーとミルクと砂糖がそれぞれ入った瓶とが置いてありました。これはミャンマーでは少しレアなことです。ミャンマーでは、料理の味も濃いのですが、コーヒーも、飲食店などで出されるものは砂糖入れすぎの甘ったるいものばかりです。僕は普段からコーヒーはブラックのまま飲む人間だったため、コーヒーと砂糖とが分けて置いてあるというのは嬉しいことなのです。早速コーヒーをカップに注ぎました。しかし事件はここから起こります。コーヒーを注いで、注いだコーヒーをそのまま飲めばよかったものを、僕はその時また「異文化」を「発見」してしまいます。どういうことかというところ、僕はふと、ミルクの入った瓶と砂糖の入った瓶の隣にもう

一つ別の瓶が並んでおいてあることに気づきました。そして僕はなるほど、と得心しました。それはイチゴジャムが入った瓶だったのですが、僕はそれを見て、なるほどミャンマーの人はコーヒーをやたら甘くするのが好きだがジャムまで入れるのか、せっかくなのでぜひ試してみようと思ったのです。しかし予想に反してジャムはコーヒーにはちっとも解けません。カップの底の方にたまるだけなので、結局はコーヒーを飲んだ後にその底に固まったジャムを飲む羽目になったただけでした。もちろんちっとも美味くはありません。僕がうろたえているところにホテルのスタッフさんが焼きあがったパンを持ってきてくださいました。この話はあとから考えると僕自身、ばかげた話だとも思います。コーヒーには砂糖とミルク、ジャムはパンにとというのは日本でも当たり前のことです。しかし、ほんの少し言い訳するならば、それはミャンマーのコーヒーは甘いという印象を予め持っていたからこうなったのかもしれないかもしれません。ちょうどそのころはミャンマーでの生活に慣れだした頃でもあり、変に「異文化」慣れしてきていたせいもあるのでしょうか。無暗な「異文化」慣れの末、なんと僕は勝手に「異文化」を作り出したのでした。これは失敗談ですが、そういう意味で面白い話なので書きました。

以上が、僕が今回のミャンマー滞在において体験したことの中で、特に「異文化」に関わる話です。1つ目が「異文化」というものを発見した話、2つ目は「異文化」を受け入れ拘交流した話。3つ目は「異文化」を勝手に過信し、偽造した話です。この様に振り返るとなかなか貴重な面白い体験をしたのかもしれないというふうに改めて思います。思い出を振り返ったところで、次に出てくる課題はこの貴重な体験を今後どう生かすかということなのでしょうが、白状すると、今のところは、この経験をどう生かそうとかいうあてはありません。しかしそうは言っても、何も思うことがないというのでもありません。僕は今回ミャンマーで「異文化」に多々出会い、それをとても不思議で、魅力的だとも感じました。それはその「異文化」が、僕にとって新鮮なものであったからこそ、そこに感じる違和感を頼りにしてできたことだと思います。そして僕はまた、これと同じようなことが自文化に対してもできたらいいというふうにも思います。とはいえこれもまだまだ漠然たるもので今後どうなるかは分かりませんが、これでもう当面書けることは書いたので終わりにします。